

# エンカウンター (ENCOUNTER)

## 第 31 号

平成 16 年 11 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

### 南原繁著作集第 10 巻より(4)

内村鑑三先生

#### 「余は如何に基督信徒となりし乎」解題

内村鑑三は文久元年 (1861) 上州 (群馬県) 高崎藩の微禄の武家に生まれた。幼少時から武士の伝統と儒教の教えによって育成されたが、札幌農学校に学ぶに及んで熱心なキリスト信徒となった。

このことが後年その生涯の使命を決定するに至ったと同時に、いかに多くの迫害と窮乏の生活を彼は送らねばならなかったか。なかんずく、第一高等中学校の講師のとき、新しく渙発された教育勅語奉戴式の礼拝問題をめぐる「不敬事件」において (明治 24 年 1 月)、彼は学の内外から国賊・非国民として攻撃され、ために妻は病を得て倒れた。

以来、職を求めて各地に転々。ついに著作生活に入ることを決意し、数年間『萬朝報』に關係して、足尾銅山の鉍毒問題等に対し社会的正義のために戦い、日露開戦に際しては非戦論を叫んだ。しかし彼の本領はキリスト教真理の証示にあり、雑誌『聖書之研究』を発行するとともに、当時の東京郊外柏木に籠って、聖書を講じ続けた。このことは、第 1 次世界大戦中キリスト再臨運動を提唱して市内中央に進出して以来、ある期間多数の聴者を集めて日曜講演を試みたほかは、終生変らなかつた。かくして昭和 5 年 (1930) 3 月、69

歳でこの世を去った。

彼は実に明治・大正を通じて、特に青年学徒に深い感化を与え、近代日本の精神界に大きな影響を残した。その書いた単行の著作は大小あわせて60余冊...がある。その文章は靈感に満ち、雄勁にして清純、読者の全身全霊を捉えねばやまぬものがある。この点、英文においても同様で、彼が若き日好んで読んだトーマス・カーライルを想わしめるものがあり、外人の間にも高く評価されている。内村の預言者・詩人たる特質によって、その著作はキリスト教文学として傑出して折り...、『基督信徒の慰め』、『求安録』とともに、本書はこの方面における明治の代表作と称していいであろう。

本書 (余は如何にして基督信徒となりし乎)の意味するもの

内村のその後の思想と活動の根本精神は、初期のこの一書に凝集されているといい。彼の創始にかかる「無教会主義」とは、聖職と信条と礼典で固められた教会制度によらず、平信徒によるイエス自身の純粹福音の主張である。また、その唱えた「日本的キリスト教」とは、その日本的性格のほかのものでなく、日本の善き伝統に接木された新たな精神をいうのである。彼が外国宣教師に反対した理由は、彼らが外国のキリスト教を直ちに日本に移入することにあつた。

彼も他の明治の先人と同じように、若くして志したところは、近代日本をいかにして興すかにあつた。彼はそれを、ただ国家または民族の興隆でなく、その根底において人間の自由と希望の宗教、それ故にまた、万民の生命と平和の福音に求めた。それこそは内村が本書の最後に把握した信仰であり、その後の生涯を通じて、そのために闘った精神である。

あたかも明治百年に当り、わが民族が経過した日本帝国の興隆と、そして敗戦による崩壊の後に、再び揺らぐことのない新しい祖国の建設の基礎には。まさにそのことが問われているのである。

## 新渡戸稲造先生

### 新渡戸稲造博士のこと

新渡戸稲造といえ、戦後の人たちには知る人も少ないであろうが、明治の末期から大正の初年にわたり、旧第一高等学校長として令名があった。齡四十代、しかもわずか数年の在職であったが、あれほど深い感化と影響を、われわれ当時の学生に与えた教育者はおそくないであろう。...

その学生たちに向って、自哲の紳士新渡戸博士が「事行」(doing)の前に「存在」(being)を、外面の世界に対して内面を、と呼びかけたことは、多くの青年の心を捉えずには措かなかつた。...

彼はその(注 軍部政治との)闘いに倒れ、生涯の志は水泡に帰したごとく見えただけども、それから12年、終戦後の日米国交の回復と平和の憲法は、彼の説いてやまなかつた国際精神の実現にほかならない。そのみでなく、おなじく力説した人間自由の精神と普遍的な教養は、新しいわが教育理念として採り容れられた。博士ばかりでなく。その他多くの先人のそうした思想と努力がなかつたならば、戦後の改革は受け容れられず、また行なわれなかつたであろう。

ちなみに、新渡戸先生とその出身札幌農学校の同郷生内村鑑三先生とは、よく対置される双壁である。後者が宗教者として、むしろ世間に超出し、無教会主義純福音を初めて説いたのに対して、前者は明治・大正・昭和を通じて、最も優れた教養人として教育・政治界にも活動した。ただ、両者が西洋のみでなく、東洋および日本の文化と伝統の上に立つ真に愛国者であったことは、おなじである。われわれの若き日、それぞれの意味で、生涯の教えと恩沢を蒙ったことにおいて、その間相違はない。

政治社会がいかに複雑困難になろうとも、人間が人間である限り、内面的教養と宗教的信仰は、いつの時代にも、若いときから追求すべき永遠的課題であり、これに対決するところに、人間の知恵と洞察とともに、自由にして勇氣ある行動も生まれるのではなからうか。

## 新渡戸博士と乃木將軍

武士道は、わが国に培われた武士の間の生き方であったが、一つの道徳体系としては、明治維新における武士階級の廃止とともに消滅したと言っていい。だが、それは明治の優れた政治家や軍人の間に生きつづけた。その典型的な一人が乃木大将であったと言っていいであろう。しかし、それはより多く治者の道徳であり、指導者の格率であった。昭和の敗戦後、日本が新たに民主・平和国家として再出発した現代に当てはめて、庶民道徳として、なお生命を保ち、新日本を築く力となり得るであろうか。

武士道には、たとえそれに伴う幾多の欠点や制約があるにしても、その名誉・勇気・忠誠・犠牲・仁義等は、およそ人間が人間であるかぎり望ましい諸徳として、永く残るであろう。それには、われわれの祖先が遺したこの伝統の上に、新しく理想主義道徳　キリスト教精神　を接木するの必要を、博士は考えていたようである。

現在、何よりも明らかなことは、新しい文化・平和国家としての日本の建設は、国民のひとりびとりが、一旦誓った主義と理想に忠誠であり、そして戦争に劣らぬ勇気と忍耐と犠牲なくして、実現されるものではないということである。

## 三谷隆正君

### 人間的なものと地上的なもの（１）

三谷隆正君逝いて、これまでに出版さるべくしてされなかった彼の全集（５巻）が、今始めて刊行（岩波書店）されつつあることは、およそ自分の名利を考えなかった彼の人柄にふさわしいものがある。私が三谷君とはじめて出会ったのは、明治４０年、今から約６０年前、われわれが旧一高（東大教養学部の前身）に入学し、第一部甲類（英法）第２組とともに編入されたときである。同級生には現在なお活躍している赤十字社長川西実三、育英会長森戸辰男、大丸会長北沢啓二郎等の諸君がいたが、三谷君はあらゆる点において同輩を傑出していた。

まず、その容姿において眉目秀麗、どこか高貴なところがあった。そして、学業の成績優秀、なかんずく語学において卓越していた。その上に、私の最も印象づけられたのは、すでにその頃から、おのずから完成された人という風格をそなえていたことである。それが齢を重ねるに従って、ますます磨かれ、人間はここまで高められるものかと思われるほどであった。彼はたしかに神のすぐれた作品、一個の芸術的作品であったといえよう。

## 人間的なものと地上的なもの (2)

そういう優れた性格がどうして形成されたか。ひとつには、天与の稟性によるとともに、幼少のときから姉上の三谷民子女史(女子学院長)の薫育とよき指導に負うたことは注意されていい。さらに、それにもまさせて、彼が内村鑑三先生をとおして得た純粹福音主義のキリスト教信仰が決定的であったことは、特筆されなければならない。このことは、四国の片田舎から東京に出て来たばかりの私などには知る由もなく、後に至って知ったところであり、彼のごとき学生が存在は当時私には一つの脅威であった。

しかも、彼において信仰とは、ただ知識や感情ではなく、道徳的意志をとおして、実践的愛の問題であった。それは、学生時代からすでに健康に恵まれなかった彼が、生涯を通じて病との苦闘と魂の試練の中から得た体験にほかならなかった。彼が内村鑑三の唱道する無教会主義を信じつつも、ある時は教会の長老として兄弟姉妹のために奉仕し、或る時は友人の牧する教会を助けて、しばしば自ら教壇に立ったことも、この実践的愛と友情の表われにほかならない。

## 人間的なものと地上的なもの (3)

およそ、三谷君ほど他人に対して信頼深く、人を懐しみ、友人を愛し、いかなる人に対してもそれぞれの個性を尊重し、人間を愛した人は少ないとあっていいであろう。人間個性の概念こそは、彼の哲学の根本概念であって、彼は好んで「個性主義」の語を用いた。同時に、個性相互の相生き相営む関係を人間の「相生関係」と称した。この二つは等しく彼の造語であり、その国家・法律に関する主著『法律哲学原理』の支柱である。そして、それは国家あるいは民族共同体を踏まえ、かつその限界を越えて世界的人類へと広がる。その点、彼をもって優れたヒューマニストと呼んで誤りはないであろう。そして、それは彼が学んだ当時の一高校長新渡戸稲造先生の感化と影響によるものと解していい。

## 人間的なものと地上的なもの（４）

東大卒業後、最初の十年を岡山の第六高等学校に、それから後 20 年、ほとんど世を<sup>お</sup>畢うるまで一高に教えた。このようにして、彼は言葉の正しい意味において「教師」、「人類の教師」であった。およそ教場または公的会合において、いまだ一度も伝道に類したことを試みなかった。けれども、学生に対する彼の人格的影響はすばらしいものであった。彼の家には、常に多くの青年が出入したが、彼はそれぞれの個性に従ってこれを導き、おのおのの境遇や能力に応じて、就職の相談にもあずかった。...

三谷君は何かの機会に、私と彼の書斎で話しているときに、植木鉢を指して言った、「僕は植物の一枚の葉でもいい、その研究に生涯を賭けても悔いはない」と。そのときの表情と真剣さを、いまも忘れることができない。実際、彼は何かの事情で、商人となって前掛けをかけることになっても、きっとその達人になりえた人である。彼は何事もすべてを直接に伝道や神の名に結び付けなければ安心しない人間ではなかった。学問についても、学問それ自身の論理と真理の世界を認め、その他いかなる仕事をも、これを単に手段視することなく、それぞれの意義と価値を認めて、尊敬を払った。



## 人間的なものと地上的なもの (5)

もともと彼の法律と国家の学は、実証的であるよりは哲学的であり、常に人生及び世界の全体的関連において構想、された。実に哲学こそは彼の生涯を通じて最大の関心と課題であつたと解してよい。この点において三谷に最も大きな影響を与えたのはカントであり、その理想主義哲学なくして、三谷の学問と人格は考えられないであろう。それほどカントに傾倒した彼であった。しかし、三谷がカントと異なった点、いわばカントより出てカントを超えたものは、宗教の問題を中心としてであった。カントの批判哲学が「理性の限界内」に於いて宗教を論ずるのにとどまったのに対して、三谷はその限界の外に宗教的神性そのものの世界に踏み入った。その点、哲学上問題もあろうけれども、それがむしろ三谷の本領と称しうべく、彼の思想と精神はそこに無限の源流を求めた。そして、そのことが彼の人生と世界観、法律と国家観の隅々にまで浸透せずにはおかなかつた。ここに、揮然たる三谷独自の思想体系をいうことができるであろう。

## 人間的なものと地上的なもの (6)

「幸福論」は、もともと病身であった彼が、かようにして漸くもった家庭生活も一朝にして潰<sup>つい</sup>え、以来孤独 20 年、世間から見れば「病余衰残の一無用人」に他ならぬ彼にも「奪うべからざる幸福諦めではない、もっと強い、もっと深い、もっと旺(さ)かな幸福とよろこび」を読者に語りたいために書かれたものである。...

同名の文献について想起されるのは、われわれが著者と同じく旧一高に学んだ時代に、岩元禎教授によって教科書として用いられたカール・ヒルティの『幸福論』である。...それほどまた、三谷はヒルティの書を好んで読み、且つ彼について書いている。だが、ヒルティの『幸福論』3巻は、人生の諸問題に関するエッセイを集めたもので、教養の香り高い、そして豊かな体験の書であるのに対し、三谷のは一つのまとまった世界観の中において取扱われ、論旨透明、すこぶる説得的である点に特色がある。ただし、聖書の真理性と純粹の福音主義の信仰が中核をなしている点は同一であり。しかも両者ともほぼ同じ年輩の頃の述作であることも興味ふかい。

## 人間的なものと地上的なもの (7)

『知識・信仰・道徳』と『幸福論』の二著は、...純粹福音主義の上に立つた「宗教的世界観」として、これほど透徹したものは、少なくともわが国にはおそらく未だ<sup>かつ</sup>曾てないと称していいであろう。

...それは一言一句、三谷が内面の苦闘の裡に書き綴つたものである。「筆者自身が苦しみ考え、苦しみつつ書いたのであるから已むを得ない。至らずとはいへ唯筆者の努力を諒としていただきたい」とも、彼は言っている。現今洪水のごとく流れ出で、やがて泡沫のごとく消えてゆく読みものの氾濫するなかに。これらの著作は真に読み応えのある。求遠の価値あるものといつては、過言であろうか。

...『幸福論』は終戦前年の早春、三谷はその校正刷りを一瞥しただけで、この世を去った。暗雲全地を覆うた世界大戦と祖国の危機のさ中に、彼は静かにこれらの著作を書いていたのである。それは祖国と同胞に贈った三谷の遺書と称していい。彼をしてなお幾年、地上に永らえしめたならば、その意図したものは「学問論」と「天国論」であつた。それほど彼は真理と永世　　光りと真の生命を人生と世界の最大の問題としていたのである。